

# いんば沼

21号

編集・発行／(財)印旛沼環境基金

TEL 043-485-0397

2001年10月1日



故 林 辰雄氏 撮影 旧舟戸の渡し

現在の船戸大橋の風景と昭和30年の舟戸の渡し場「行商に向かう人達」の写真です。撮影者は、故 林辰雄氏で昭和63年に白井公民館で開催された、昭和30年代の風景「ちょっと昔の印旛沼写真展」からの1枚です。舟戸大橋、甚平衡大橋が無かったときの苦勞が推測できる印旛沼白井の渡しの風景を切り取った作品です。白井の渡しを知っている人もだんだん少なくな

## 旧白井の渡しと舟戸大橋の風景

ってきているのではないのでしょうか、この写真を見ながらちょっと昔のお話の花を咲かせて下されば幸いです。新しい写真は平成4年に舟戸の渡しの周辺で、絵を描いたり沼の散歩を楽しんでいる人達の情景を写し取った一枚です。撮影者は高橋三千夫氏で、印旛沼白書や雑誌いんば沼の表紙を飾る写真の提供者です。当時の人々の服装や背景の雰囲気をお楽しみ下さい。

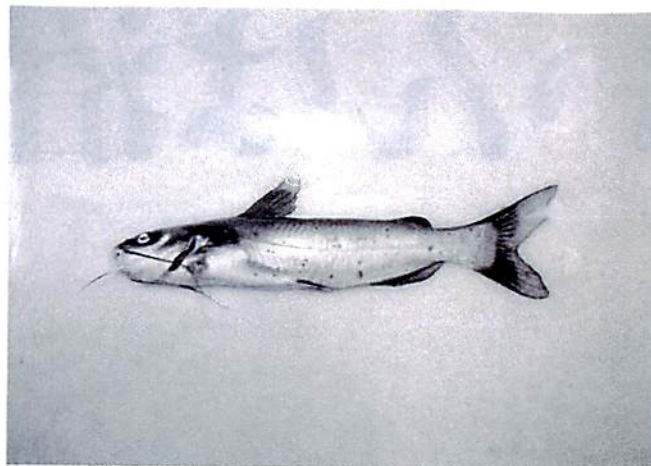


高橋 三千夫氏 撮影 舟戸の渡し跡

## ～印旛沼への 新たな侵略者～

内水面水産研究センター  
資源環境研究室長

松丸 豊



印旛沼には、今までに様々なよそ者の魚が侵入してきていますが、なかでも近年では全国的に繁殖して問題となっているブラックバスやブルーギルについては、既に本誌3号や14号で取り上げられています。現在ではブラックバスやブルーギルは以前ほどの異常繁殖はみられず、沼の生態系の一部として安定したように思えます。しかしながらごく最近になって、新しい外来魚が沼で採捕されました。それは、ブラックバスやブルーギルなどと同じ北米原産のアメリカナマズです。今後バスやギルのように大繁殖する可能性もあるので、当研究センターもその動向を調査していくつもりです。

### 1 アメリカナマズとは

アメリカナマズは、アメリカではチャネルキャットフィッシュと呼ばれ、同じ仲間のキャットフィッシュが数種類（ホワイト、ブルーなど）知られていますが、本種だけが日本に移入されています。他のキャットフィッシュとは、体側にある多数の黒い斑点により、容易に区別できますが、成長して大きくなると体が黒ずむので、判りにくくなります。大きいものでは、全長1.2m、体重11kgほどになりますが、時には26kgもの大物が見つかった例があります。

アメリカナマズと呼ばれていますが、日本のナマズが4本のヒゲを持つのにに対し、8本のヒゲを持ち、むしろギギやギバチの仲間に近い種類です。ギギと同様背鰭と胸びれの付け根にのこぎり条の鋭い棘があり、胸びれ起部には毒腺があります。毒といっても人体に影響を与えるようなものではないのですが、棘は非常に鋭いため、うっかり手づかみすると怪我をしますので、気をつける必要があります。

日本のナマズとやや異なり、細長い体型で、頭の部分は平たく、8本のヒゲのうち、上あごの1対2本は太くて長いため、よく目立ちます。尾鰭は普通の魚のように切れ込みがあり、二又しています。背鰭の後ろには鰭条のない脂鰭があります。

北米では、養殖対象種としてミシシッピ川沿いのミシシッピ州、アーカンソー州、テキサス州などで盛んに養殖されており、鮮魚或いは冷凍魚としてマーケットで市販されています。市販サイズは主に500g前後で、生肉はうすいピンク色をしています。ボイルすると白身となり、淡泊で生臭さがないといわれています。ハンバーガーで使用されている魚のフィレはアメリカナマズが使われているそうです。

### 2 移入の経緯

昭和46年に日清製粉株式会社中央研究所が5gの稚魚2,000尾を米国カリフォルニア州の養魚場より導入したのが始まりで、同時期に淡水区水産研究所にもジョージア州より発眼卵で導入し、宮崎県などに分与しています。また、昭和50年頃より第一屋製パン株式会社宇都宮工場でハワイやカリフォルニアから二、三歳魚を導入して、養殖を始めています。昭和53年頃より種苗生産が軌道に乗り、各地（仙台、岐阜、鹿児島など）の養殖場に稚魚の販売を始めると同時に、霞ヶ浦で網生け簀養殖も行っています。その後、埼玉県でも食用に養殖されるようになり、利根川で採捕されたのは芦原修二著「川魚図譜」によれば、埼玉県の養殖場から昭和57年の台風により養魚池より逃げ出したものと考えられています。

このように、昭和58年ころより利根川で採捕されていましたが数は少なかったようです。ところが、平成12年に霞ヶ浦でアメリカナマズの稚魚が大発生し、大量に漁獲されたと茨城県の試験場から報告されました。利根川や印旛沼で漁をしている漁師の話によりますと、同時期に利根川でもかなり採捕されるようになり、印旛沼でも数さえ少ないが採捕され始めたそうです。当研究センターの調査でも、平成8年に印旛沼でアメリカナマズが1尾採捕されています。また、平成12年には、利根川と印旛沼をつなぐ長門川水系で多数のアメリカナマズが採捕されています。

### 3 アメリカナマズの生態

河川や湖沼の流れがゆるやかで、底が砂や泥の場所を好んで生息しています。水温1℃から35℃までは生存可能ですが、39℃では死んでしまいます。成長に適した水温帯は28℃から30℃とやや高い水温で、夏期の高水温の時期にもっとも成長がよいといわれています。昼間は物陰や岩陰などに潜んで、あまり動きませんが、夜になると活発に餌をとり活動的になります。産卵期には日没後に産卵する夜行性の魚です。塩分が1%位の汽水でも正常に成長しますが、0.2%以上の塩分があったり、周年水温が一定の場合には産卵できません。

ふ化して間もない稚魚の時期には、ワムシやミジンコなどの動物プランクトンや藻類などの植物プランクトンのような微小なものを食べていますが、成長すると魚卵やユスリカの幼虫などの底性動物や植物の種などやや大きい餌を探ります。成魚では小さな魚やエビ類、昆虫なども食べる雑食性です。日本にいる在来のナマズにくらべ草食性がつよく、植物蛋白を効率よく利用するといわれ、稚仔魚でも全く共食い現象はみられません。

雌雄とも2~3才で成熟し、雌は体重1kg以上で産卵可能となります。体重1kgあたり約1万粒の卵を持ち、産卵量は平均的には2万粒程度です。産卵期は5月から7月で、水底の物陰にある窪地あるいは穴を掘って産卵床を作ります。卵は1段ずつ順に重ねられ、粘着質のため大きな塊状となります。産卵後は雄が雌を追い出し、鰭で水を動かしながらふ化まで保護します。卵塊の大きさは、直径25cm前後、高さ4cm程度の円錐形状で、あめ色をしています。1粒の卵の直径は3~4mmで、卵の発生が進むとあめ色に赤味が加わります。

ふ化水温は21℃~27℃ですが、最適水温は25℃前後で、受精後21℃で10日、25℃で6.8日、27℃では6日でふ化します。ふ化仔魚は体長11.6mm、体重約28mgで、ふ化したての仔魚は卵黄を持ち、産卵床の数ヵ所に群がりますが、雄親は鰭を動かして適度に仔魚の群を分散させます。ふ化後ほぼ5日で卵黄を吸収して泳ぎだします。

ふ化した年の秋までに体重30~80gに成長し、2年目で300~700g、3年目には1~2kgになります。最大120cmにもなりますが、普通の大きさは70cm前後です。

### 4 生態系への影響

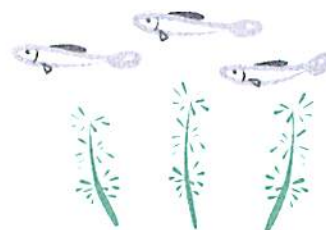
外来魚と呼ばれるオオクチバスやブルーギルもアメリカ原産の魚類で、もともと日本には居なかった種類ですが、このような外国から移入された生物は在来の

競合種が存在した場合影響が大きく、外来種が定着できずに消滅するか、在来種が絶滅してしまうことが多いようです。これまでの例では、アメリカザリガニやタイリクバラタナゴのように競合するザリガニ類やタナゴ類を駆逐しつつある現状を見ますと、なるべく河川や湖沼のような天然水界への外来種の侵入をくい止め、在来種の保護を考えなければならないと思います。アメリカナマズの場合には、日本のナマズと食性や産卵生態がやや異なるとは思いますが、在来のナマズが減少しつつある現状からみますと、消滅速度を速めることになるのではと危惧されます。

### 5 むすび

本来、その生息地の環境条件に適合し繁栄してきた在来種は、侵入してきたよそ者にくらべ、その地域での優位性があるはずですが、環境の変化が大きくて急激であると、その変化に適応できずに衰退することが多いと考えられます。例えば、ナマズの繁殖生態をみますと、水田の圃場整備がなされる前には、印旛沼と水田とは用排水路で結ばれていたため、産卵期には親ナマズが水田内で産卵し、生まれた仔魚は水田内のミジンコなど豊富な餌料で育ったのち、沼に入って更に大きく育つような繁殖戦略が可能でした。しかし、圃場整備がなされている現在、沼と水田とは切り離され、沼周辺部の湿地帯など限られた、しかも外敵の多い場所で産卵するために、印旛沼でのナマズ生息量は少なくなっていました。このような環境になった時に、産卵生態が異なり、産卵場所に外敵が多くても、雄親が卵や仔魚を保護する習性のあるアメリカナマズのような種類はむしろ繁栄する可能性があると思います。

この例は、人為的な環境の変化により、在来種に変わって、より変化した環境条件に適合した種類が繁栄する、つまり魚種の交代が起こることですが、それよりも人為的な影響が大きい環境変化があります。それは、水質、底質の悪変により、多数の種類が絶滅してしまい、魚種の交代ではなく生息する魚が限られてしまう種類数の減少が起きていることです。汚濁に強い少数の魚種のみが生息するようになると、当然、いなくなった魚種の生態的に空いた所に、外来魚など侵入者を受け入れることになります。このように、外来魚の侵入、繁栄は、生息環境の変化つまり水質汚濁と関わっていると言えるのではないのでしょうか。



# 花づくりは人づくり

成田市立中台中学校  
校長 小川 新太郎

## 1. はじめに

最近の青少年の状況を見ると、けっして安心できる状況にないことは誰しも感じるところです。

社会では、青少年の規範意識の低下が叫ばれ、千葉県においては通学電車を利用する高校生のマナーの悪さがマスコミに取り上げられるなど、公共の場での個人や集団のモラルが問われています。

また、少年による凶悪犯罪が年々増加の傾向にあり、青少年の心の歪みが、マナーの低下や事件となって現れているものと思われます。

このような状況を考えるとき、学校教育が早急に取り組んでいかなければならない課題は「心の教育」であろうと考え、本校では、花づくりを通して「豊かな心の育成」を図っています。

## 2. 環境は人づくりのもと

動物も植物も環境に適応しようとして進化してきたと言われるように、環境は人の成長に大きな影響を与えてきています。子供が生まれ、成長をしていく過程の中で人的環境、社会的環境、自然環境等の影響を受けながら成長し、個が確立し大人へと成長していきます。その時の環境が、個の成長に大きな影響を与えることは周知の通りです。

親が子供が小さいときに本を読んでやったり、音楽を聞かせたり、情操教育に力を入れてきた家庭では子供の情操は高まり、読書や音楽を好む子供に成長します。

また、北狐の世界でも同じようなことが言えるそうです。木登りの得意な父狐の家族は、皆木登りが得意になり、泳ぎのうまい父狐の家族は、皆泳ぎが上手くなるそうです。

人は成長していく過程で人的環境や社会的環境、自然環境に大きく影響され、自然の内に入りこまれて育っています。言い換えれば環境によって人が育てられていると言っても過言ではありません。人を育てる場としての学校にとって、環境は大切な教育条件の一つと考えています。



## 3. 花づくりは人づくり

2年前の中台中学校の中庭は、大規模改修のために砂利だらけの荒地になっていました。その時、教育委員会から中庭の利用計画を考えるように言われました。中学校は思春期の多感な生徒が3年間過ごすところです。その環境を考えた時、いつでも美しい花が視野に入る環境であれば情操面で良い影響があり、自然と豊かな心が育つと考え、全面花壇にしてくれるよう要望を出しました。教育委員会は快く要望を聞き入れてくれ、平成12年の春に花壇が完成しました。

また、花づくりは道徳教育の一環であると考え、「総合的な学習」の時間を使い、全校生徒で種から花を育て、花壇に植えるようにしました。

### (1) 花づくりの目的

- ①花を育てるには思いやりの心が必要であり、花づくりを通して「思いやりの心」を育てる。
- ②わずか1mmにも満たない花の種にも命があり、きれいな花を咲かせる自然の生命の力を知らせる。
- ③長期間に渡り、花の世話をしていくなかで責任感を養う。
- ④毎日食べている食物（米、野菜、果物等）も長い時間をかけて作られていることを知り、食べ物に対する感謝の気持ちを育てるとともに大切に作る心を養う。
- ⑤全校生徒の力により、種から長い時間かけて花壇に

- 花が咲いたときの感動、成就感を通し感性を育てる。
- ⑥花の観察を通し、花（植物）は土、水、温度肥料等の影響を受けて成長することを知らせるとともに、土は我々生き物の生命の源であることを理解させ、環境の大切さを考えさせる。
  - ⑦中学時代の多感な時期に、毎日美しい花に囲まれながら生活することにより、豊かな感性と心を育てる。
  - ⑧特色ある学校作りの第1歩として「花の咲き誇る学校」を誇りと思う生徒を育てる。

#### (2) 花づくりの方法

- ①5月と9月に、各学級及び選択技術（ガーデニング）へ、ピートバンと花の種約500粒を配布し、種を蒔かせ、教室で発芽させます。
- ②本葉が4枚以上出てきたところで3号ポット移植し、ベランダで管理します。
- ③春苗は、7月に花壇に定植します。秋苗は、冬期霜よけのためにビニールトンネルに入れ管理し、3月に花壇に定植します。

花は、春・秋とも丈夫で花期の長いものを育てています。

花の苗をポットに移植する時と、花を花壇に定植する時は「総合的な学習」の時間を割り当てています。

花壇は、各学年、選択技術（ガーデニング）に割り当て、その設計は各学年、選択技術にまかせています。

春の花（キンセンカ、デージー、キンギョソウ、パンジー、ピオラ、シノグロッサムクリサンセマム、カイガラソウ、ナデシコ、ロベリア、ノースポール、ガザニア等）

秋の花（サルビア、マリーゴールド、ケイトウ、コリウス、トレニア、ペチュニア、インパチェンス、コスモス等）

### 3. 花づくりの成果

- 花づくりを始める前は、花壇の花を平気で踏みつける生徒がいましたが、全校生徒による花づくりを始めてからは、花壇の面積が圧倒的に増えたにもかかわらず、花を踏みつけたり、折ったりする生徒がなくなりました。
- 生徒は、花を学校の自慢にし、花の咲き誇る学校を誇りに思う生徒が増えました。
- 学校をよりきれいにしようという意識が強くなり、清掃への取り組みが向上しました。
- 栽培日誌の生徒の声「花を植えたところを踏まないように、水を欠かさないようにと毎日見守っています。」にあるように、思いやりの心が育っています。
- 美術の作品や作文に花を題材にする生徒が増え、情操面に効果が現れています。



### 4. 終わりに

全校生徒で種から花を育て、花壇作りをしています。その成果は「花づくりの成果」に書いてあるように具体的に現れているように思えます。

特に花づくりで大切にしていることは、花づくりを道徳教育としてとらえているところです。小さな種の中に命があり、優しさ、思いやりの心を込めて大切に育ててやると、お礼に3ヵ月後にきれいな花を咲かせ、花を育てた人に美しさと感動を与えてくれます。また、手をあげば花は死んでしまい、悲しみを教えてくれます。花づくりには「命、死、感動、優しさ、思いやり、悲しみ、成就感、責任感」等道徳的要素がたくさん含まれています。花づくりは1時間の授業ではなく、年間を通して取り組んでいるところに意味があります。そして、花は、育ててくれた人に優しさと思いやりの心を育ててくれているものと考えています。

また、中台中学校の生徒は、3月～11月まで花に囲まれながら生活しています。中学時代の多感な時期、美しい花に囲まれた環境のなかで生活していることにより、自然に感性や心が育まれてものと思っています。

本校では、「心の教育」を体験的な経験や環境により、高い効果が期待でき、高められるものと考え、花づくりを行っています。



# 鳥からみた印旛沼

河邊 久男

印旛沼には、さまざまな鳥がいます。四季折々双眼鏡を首から下げてバードウォッチングを楽しむ人を見かけます。このような人達はすぐ近くの手賀沼にも出かけて鳥に親しみます。なぜなら同じ沼でも生息する鳥が違っているからです。手賀沼にはアオサギやオオバンが多く、オオバンは我孫子市の市の鳥にもなっています。鳥の種類の違いがそのまま、沼の自然環境の違いを示しているのです。

一般に沼周辺の植物環境は四つに区分しておけば、鳥を観察することに支障はありません。つまり、イネのようにはえるチガヤ・オギ群落、人の背丈を越えるヨシ群落、水辺を縁どるマコモ・ガマ群落、そして水面上の植物群落です。水面上にはカモ類が生息し、マコモがはえる水辺にはオオバンやバンが隠れ潜みます。ヨシ原ではオオヨシキリがさえずり、チガヤの中ではセッカがクモの糸で葉をつなぎ巣をつくります。このような鳥たちが水辺の鳥たちと呼ばれて親しまれています。

しかしながら印旛沼には、全国的にみても稀な鳥たちが生息しているのです。以下紹介します。

## (1) サンカノゴイ

ヨシ原の奥のなかで、ピンの口に息を吹いて出す「ポウ」というような低い声で鳴き、その姿を見つけたことは容易でない鳥です。この鳥は全国的にも少なく、繁殖するための巣は、10数年前に琵琶湖のヨシ原で日本で初めて確認されました。二番目の巣が利根川下流域の小見川のヨシ原で確認され、三番目の巣がこの印旛沼で筆者によって確認されました。ヨシ原の水のたまった地上部に枯れヨシをうず高く積み上げて巣をつくってありました。

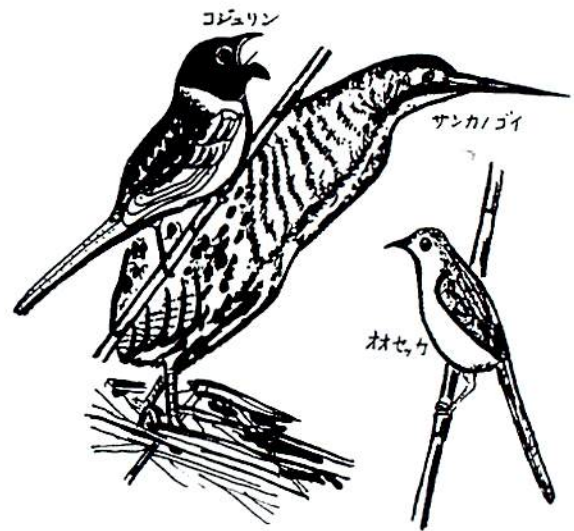
日本の環境庁が作成したレッドデータブックには、これから日本で絶滅が心配される鳥たちがいくつかに分けられて、載っています。トキは野生絶滅、コウノトリは絶滅危惧1A種として区分され、サンカノゴイは絶滅危惧1B種の扱いです。全国調査をしても数十羽ぐらいしか生息していないでしょう。野鳥の図鑑が数多く出版されていますが、サンカノゴイの撮影地は本埜村と印旛村が多いです。全国の野鳥図鑑には印旛沼のサンカノゴイの写真が使われているのです。

## (2) オオセッカ

この鳥はレッドデータブックに絶滅危惧1B種としてリストアップされている鳥です。全国的な分布は青森県の仏沼と利根川下流域です。ほんの数羽ですが印旛沼にも生息し、独特の舞い上がってさえずる行動をしています。

## (3) コジュリン

上記のオオセッカと同じ分布地を持っていますが、熊本県の阿蘇山麓の草原にもいます。全国的には三ヶ所の分布です。この鳥に足輪をつけて鳥の渡りを調べる標識調査をしたところ、青森県のコジュリンは、冬期、利根川のヨシ原で越冬することが判明しました。筆者も標識調査に参加してその事実を確認しています。オオセッカよりもやや多く印旛沼に生息しています。絶滅危惧2類種です。



これらの鳥はすぐ近くの手賀沼にはいないのです。人の目には同じように見える沼であっても、鳥たちはその自然度を明確に区分して生息しているのです。

平成4年に本埜村の水田にコハクチョウが飛来し、毎年増え続けて平成12年度には257羽にもなりました。印旛沼とは2kmほどしか離れていないのに、印旛沼に羽を休めることはしません。このことは、コハクチョウにとって印旛沼は不十分な環境であることを示しています。本埜村の白鳥を守る会のみなさんに、「トキがやってくるまで頑張りましょう。」と声をかけますと、みなさん笑いますが、今年の1月に7羽のマガンが舞い降りたのです。かつて印旛沼には数多くのガン類が飛来したと記録がありますが、マガンがやってきた意義は大きいです。レッドデータブックにリストアップされている稀少種が生息している印旛沼は、全国に残されている数少ない貴重な自然環境であり、これらの鳥たちが印旛沼の草原を舞っている姿は、沼の周りに豊かな生態系が保たれていることを測る指標なのです。いつの日か、印旛沼周辺でトキが舞う姿を見たいと願っています。

日本鳥学会会員・白井市立南山小学校勤務

## 利根川図志にみる印旛沼

白鳥 孝治

利根川図志第四巻の冒頭に、印旛沼のことが詳しく書かれている。「水上は船尾村（印西市船尾）神崎橋より落ち、一方は佐倉の城山をめぐりて鹿島橋より落ちる。下は安食（栄町）より利根川に合す。およそ長さ七里広さ二里ばかり」とある。広さ（幅）が8kmとは広すぎるように思われるが、昭和初期の地図で北沼の広いところの幅をみると、この位である。

印旛沼の土産（ドサン）として、次の生物を上げている。

魚類など、鯉（コイ）、鮒（フナ）、鰻（ウナギ）、鯰（ナマズ）、鱒（ボラ）、鮠

（ハヤ）、腹赤魚（ハラカ  
・うぐいのこと）、サイ  
（にごいのこと）、マ

ルタ（うぐいの降海形）、蟹（カニ）、鱈（  
ドジョウ）、海老（ツ  
ノガラエビ、中エビ、ヌ

カエビ）、蜆（シジミ）、田貝（タンカイ）、ゲバチ  
（ゲンギョ、ギギウ、ギバチ）、

水鳥類 雁（ガン）鴨（カモ）、ヒス、ナガハジロ、  
タカブ（小鴨）、アジ、鷺（種類多し）、鶉（ウ）、  
鴨（シギ）、此の外雑鳥数多し。

水草類 菱（ヒシ）、真菰（マコモ）、葦（アシ）、  
蒲（ガマ）、荻（オギ）、川骨（コウホネ）、澤瀉、  
スゲなどの類も多し。

ここにみられる生物種は、昭和40年代初期まで普通にみられたものであり、近年まで生物種の大きな変化はなかったとみられる。多分、水質を含めて、印旛沼の自然環境は、江戸時代から昭和中期まで、あまり変わっていないものとみられる。

また、名物として“吉高鮒”の話がある。黄色で骨が堅く、肉がしまっておいしい。この鮒を捕るには、冬、一人で小舟に乗り、浅いところで棹をさしながら鮒（フナバタ）、を踏んで舟を左右に揺り動かす。波の音に驚いて鮒は藻のの根に隠れる。水の濁るのをみて、手づかみする。故に手取りの鮒ともいう、とある。“寒ブナ”のことであろう。沼の水がよく澄んでいたことが伺える。

鳥については、利根川図志第五巻に次の二種の記事

がある。[谷原イボ] 昼は人目につかず、見る人は少ない。大きき羽の色ともにトビに似て黄色帯びている。五月頃から、たそがれ時にヨシの中でスー（細く）ポウイ（大声で）と鳴く声は法螺に似ている。挿絵にサギに似た鳥を克明に記載してある。

[ボンボン鳥] 小鳥で、谷原に棲む。夏月昏夜にボンボンと細い声で鳴く。鳩より小さい。

この二種の鳥は現在の呼び名が分からず、挿絵のような鳥はいない。野鳥専門家の小倉正一氏は次のように述べている。

「ボンボンどり」の（方言）呼称について、農林省・農務局刊（大正14年11月28日刊）「鳥類の方言」には、ツツドリを「ぼんぼんどり」としてあるが、本種は山地に棲むホトトギス科の夏鳥であり、これは当たらないと思われる。

また、清棲幸保「日本鳥類図鑑」「動物方言」には、ヒクイナ（緋水鶏）を「ボンボンドリ」とあり、本種は鳴き声も「ほうほう」と聞こえ芦原に生息する。体長は約2.3cmで、ハト（約3.3cm）より小さい。

サンカノゴイ（山家五位）は、繁殖期の4月から5月にかけて「ぼおー、ぼおー」と霧笛のように聞こえる声で良く鳴く。体形は、ハトより大分大きく、約70cmもある。

ミゾゴイ（溝五位）も、同じような声で「ぼおー、ぼおー」とか「いぼー、いぼー」と鳴く。林の中か沢や水辺に出てきて、カニやミミズなどを補食し、「やまいぼ」との呼び名もある。

ヨシゴイ（葦五位）は、体長約36cmで、ハトとほぼ同じか、やや大きい位だが、季節タイプは、夏鳥である。同じような声で「おー、おー」と鳴く。

ヨシゴイより大きいオオヨシゴイ（大葦五位）も、低音のリズムで「ぼつ、ぼつ」と鳴く。

このようなことから、「谷原イボ」という名の鳥は、「サンカノゴイ」か「ミゾゴイ」を指すものと思われる。（小倉正一氏、私信）

「利根川図志」は江戸時代末期に赤松宗旦によって江戸時代末期に書かれた本です。利根川下流付近の当時の様子や言い伝えなどが詳しく書いてあります。その中から生き物関連の一部を記載してみました。



印旛沼環境基金主任水質研究員

暮らしと水

# 「古川」

千葉 智

話は60年も昔にさかのぼります。佐倉庭園と呼ばれているこの辺り一帯の台地の裾では、至る所に清水（しみず）と呼ばれる小さな湧水があって、サワガニが潜み、シミズドジョウという小魚なども住んでいたものです。清水から出た細い流れは堰（せき）と呼ばれる小川に集まり、近くの高崎川に入ります。その間の田圃は湿田で一年中水が溜まっていて、タニシ、ドジョウ、カエルなどが暮らす場所でした。そして、近くの林に住む鳥やイタチなどの小動物にとっては格好の猟場となっていたのです。

その頃、人々が「新川」と呼んでいた高崎川の堤防の外側には、改修以前の高崎川の蛇行部分が三日月池となって各所に残っており、これらは「古川」と呼ばれていました。

子供達が川に入ってシジミを採ったり泳いだりするのは水のきれいな「新川」、掻い掘りや魚釣りをするのは堰や「古川」と大体の相場が決まっていた。水田の排水や近くの人家の排水はこの「古川」に集まっていたのでしょう。「古川」の水は大抵うす濁っていましたが、ヨシの茂みに囲まれた水の中にはキンブナ・タナゴ・ナマズ・ギギ…今では絶滅した魚もたくさんいました。両生類のイモリや食用ガエル（ウシガエル）、水生昆虫類ではタイコウチ・タガメ・ゲンゴロウなど、吸血動物のヒル、等々、実に多種多様な生き物が住んでいて一寸不気味だけれども、子供達にとっては漁の期待に胸をときめかせる場所でもあったのです。

今考えてみると、この 湧水⇒湿田⇒堰⇒古川 の間には極めて安定した生態系が出来上がっていて、河川への汚濁物質の流入を軽減していたのではないのでしょうか。特に「古川」の存在は、巧みに「生物利用水浄化施設」の役割を果たしていたと思えてなりません。

あれから半世紀を経た現在、水田はすべて乾田となり、「古川」は埋め立てられてその痕跡もありません。川岸近くまで立ち並んでしまった住宅地の排水が、直接注いでいる高崎川の水は、触れるのも憚られるほどです。水田の乾田化が農業の合理化・食糧増産のために貢献した一方で、自然生態系の一環としての水田の機能を失った事実も認めなければなりません。

いまさら湿田や「古川」を復活させることはできない相談ですが、谷津の荒廃地や休耕田等をうまく活用して遊水池（湿地）のようなものを造ること位は不可能ではありません。（勿論、地権者の利益保護は必要です。）このような事業は、河川へ流入する水の浄化と自然生態系の保全の両面に有効な手段であって、延いては印旛沼の汚濁防止にもつながるものと考えられるのですが…。はかない夢でしょうか？。

元印旛沼環境基金水質研究員

アメリカナマズ



内水面水産研究センター 尾崎真澄氏 撮影

## 編集後記

読者の皆様は、印旛沼のイメージとして、どんなこと想像されるのでしょうか、30年前のイメージでは、洪水での苦労や通勤、通学での苦労が、最優先として脳裏に浮かんだことと思います。今では屋形船に乗った花火がきれいだった、釣りが楽しかった等、苦労話より楽しんだことが優先されるでしょう。その結果として、印旛沼が私達の身近な生活の場からは、忘れられているのではないのでしょうか、印旛沼の水質汚濁が日本で二番目になっていることと重ね合わせて、もう一度印旛沼の現状に目を向けてください。

今回は母校の中学校を、花で飾り学校生活を楽しく気持ちの良い空間にしようと、取り組んでいる生徒達の取り組み。

印旛沼に外来魚種として入り込み、繁殖しだしたアメリカナマズの生態。

印旛沼に飛来する珍しい鳥の話や、利根川図志にみる鳥のおもしろい話。

また、昔の懐かしい子どもの水遊びについて紹介しました。

皆様の身近な雑誌として印旛沼周辺の情報を伝え、印旛沼の水質保全について活動下さっている人々や、諸団体に少しでも役立つことを願っています。

読者の皆様の印旛沼に寄せる様々な情報をお待ちしております。